

鎌倉大仏殿高德院
「ジャヤワルダナ前スリランカ大統領顕彰碑」に託された
平和への願い

日本を救ったブッダの言葉



ジャヤワルダナ前スリランカ大統領顕彰碑

碑に記されたお釈迦様の言葉

人はただ愛によってのみ
憎しみを越えられる
人は憎しみによっては
憎しみを越えられない

法句経五



顕彰碑が語るブッダの言葉と今日の日本社会

現在の日本社会を繁栄に導いてくれた、分岐点にブッダの言葉が大きな力となった歴史的事例の証拠として1991年に建立された顕彰碑があります。J. R. ジャヤワルダナ元スリランカ大統領が1951年サンフランシスコ講和会議でなされた演説は、戦後の日本の運命に大きな影響を与えました。そこにはブッダの言葉を引用して、アジアの将来にとって、完全に独立した自由な日本が必要であると、一部の国が主張する日本分割案を退けているのです。今日の私たちも決して忘れてはならない歴史的な出来事です。この業績を末永く留めるために、鎌倉大仏殿高徳院の佐藤蜜雄住職を推進委員会長として、上坂元一人氏、野田卯一氏、中村元氏ほか多くの皆さまの賛同を頂き建立されました。中村元東方学院院长（当時）が、その思いを顕彰碑誌に刻み残しています

戦後、輝かしい発展を遂げ、1991年にはバブル経済はピークとなりますが、その後の経済成長は鈍化し、高齢化率も世界一高く、次世代を担う若者の人口は減少し、就労者の多くが低賃金を余儀なくされています。その結果、人間関係が疎遠化し、相手を思いやる心の余裕が失われ、不満が蓄積し、些細なことで感情を爆発させる人々が増えています。世界に目を向けてみると、2020年に入り、各国が自国の経済を優先し、国際的な競争や紛争が激化しています。

このような時にこそ、再び、サンフランシスコ講和会議のジャヤワルダナ元スリランカ大統領の演説の全文を読んで、ブッダの言葉が与える意味と影響力の大きさを実感して欲しいと思います。

このパンフレットは元大統領の言葉をぜひ皆さんに知っていただきたいと思い、制作をいたしました。

5頁で碑の背面に刻まれた中村元先生による顕彰碑誌をご紹介します

ます。

4頁でジャヤワルダナ元大統領によるサンフランシスコ講和条約演説全文の日本語訳をご紹介します。この演説を読みますと、寛容の心を以て、日本と日本人を勇気づけ励ましてくれたジャヤワルダナ元大統領の真心を感じます。そしてその功績により、現在の日本の独立と繁栄があることをはっきりと知ることができます。

10頁でジャヤワルダナ元大統領がスピーチされた英語の原文を掲載しました。外国の方にも読んでいただければ幸いです。

18頁でスリランカ民主社会主義共和国駐日特命全権大使ダンミカ・ガンガーナート・デイサーナーヤカ氏よりこのパンフレットのためにいただいた心温まるメッセージ掲載いたします（2019年12月10日に拝受）。大使は2019年12月31日に離任されました。

20頁で公益財団法人中村元東方研究所理事長前田専學先生より、顕彰碑誌を残された中村元先生の平和への願いを伝える文章をお預かりしましたのでご紹介します。

ジャヤワルダナ元大統領のこの演説の感動は、現在の日本人の私たちにも直に伝わってまいります。多くの方々に感銘を与えたこの演説を、一人でも多くの方に知っていただきたいと思い本誌を制作いたしました。

皆様のお幸せをお祈りいたします。

後藤一敏

J. R. ジャヤワルダナ前スリランカ大統領顕彰碑誌

この石碑は、1951年（昭和26年）9月、サンフランシスコで開かれた対日講和会議で日本と日本国民に対する深い理解と慈悲心に基づく愛情を示された、スリランカ民主社会主義共和国のジュニアス・リチャード・ジャヤワルダナ前大統領を称えて、心からなる感謝と報恩の意を表すために建てられたものです。

ジャヤワルダナ前大統領は、この講和会議の演説に表記碑文のブッタの言葉を引用されました。そのパーリ語原文に即した経典の完訳は次の通りであります。

『実にこの世においては、怨みに報いるに怨みを以ってしたならば、ついに怨みの息むことがない。怨みをすててこそ息む。これは永遠の真理である。』（「ダンマバダ」五）

ジャヤワルダナ前大統領は、講和会議出席各国代表に向かって日本に対する寛容と愛情を説き、日本に対してスリランカ国（当時セイロン）は賠償請求を放棄することを宣言されました。さらに「アジアの将来にとって、完全に独立した自由な日本が必要である」と強調して一部の国々の主張した日本分割案に真っ向から反対し、これらを退けられたのであります。

今から40年前のことですが、当時、日本国民はこの演説に大いに励まされ、勇気づけられ、今日の平和と繁栄に連なる戦後復興の第一歩を踏み出したのです。今、除幕式が行われるこの石碑は、21世紀の日本を創り担う若い世代に贈る、慈悲と共生の理想を示す碑でもあります。

この石碑から新しい平和な世界が生まれ得ることを確信します。

1991年（平成3年）4月28日

ジャヤワルダナ前スリランカ大統領
顕彰碑建立委員会
東京大学名誉教授
東方学院長 中村 元 謹誌

The Japanese Peace Treaty (日本語訳)

日本との講和条約

Speech at the Conference for the Conclusion and Signature of the Treaty of Peace with Japan, San Francisco, U.S.A. 6th Sept. 1951

1951年9月6日、サンフランシスコに於ける日本との平和条約締結調印会議でセイロン政府代表として J. R. ジャヤワルダナ氏が行った演説。

スリランカ民主社会主義共和国大使

スリランカ民主社会主義共和国大使館

* * * * *

日本との講和条約

スリランカの元大統領である（当時セイロン政府の大蔵大臣）J. R. Jayewardene 氏が、1951年9月6日サンフランシスコに於ける日本との平和条約締結調印会議で行ったスピーチ。

副大統領および友人の皆様：

平和条約草案の承認にお集まりの51カ国の方々を前にしてセイロン政府の見解を述べる機会を与えられたことは、私にとって非常に光栄なことと存じます。

私の申し上げることは、この条約を承認するその理由と条約の承認におけるいくつかの批判についての釈明をもかねると存じます。

私はセイロン政府を代表してのみ発言することができるわけですが、アジアの人達の日本の将来についての一般的な感じ方を、声を大にして述べ得ると断言します。今審議中の平和条約が最終草案に仕上がるまでの経緯について、私達が言及する必要はありません。アメリカ代表のダレス氏と英国代表のヤンガー氏が、1945年8月の日本の降伏から初めて充分かつ公正なる説明をされました。

しかしこの条約の草案の作成にあたって四大強国の間に大きな意見の相違があったことは見過ごしてできないことです。ソ連は、四大強国のみが——即ちアメリカ、英国、支那（中国）及びソ連の外相理事会——草案作成に参加すること、それ以外の国が加わる場合は拒否権が与えられるべきと強く主張しました。

英国はその自治領の国々とも相談すべきであると主張し米国はこれに同意し、その両国は日本との戦争に参加したすべての国にも相談すべきだとの立場を支持したのです。

これらの国の中にも条約の実際的な条件については見解の相違——或る国は軍国日本の台頭をおそれ、又ある国は日本軍の侵略による被害と恐怖が忘れられず——があったのです。

完全に独立した日本にすべきだと立案され討議されたのは、1950年1月の英国連邦外相によるコロombo会議の場であったことを私は申し上げたい。コロombo会議では、日本を孤立した例ではなく、世界の富と人口の大部分を占め、かつ最近自由を再獲得したが、結果として長い間放置され今も苦しんでいる人々を抱える、いわゆる南方及び東南アジアの一部として日本を取り上げたのです。この会談から二つの考え方が出てきました。一つは、日本は独立した国にす

べきであり、もう一方は、南方及び東南アジアの人々の経済及び社会的立場の向上を図るために必要で、それを実現するためにコロombo計画として現在知られている計画が着手されたのです。

英国代表のヤンガー氏はコロombo会談後、英連邦高等弁務官実行委員会が条約の草案を作成し、またそれを後でアメリカ代表のダレス氏とも検討したことを我々に明らかにしてくれました。

我々の前にあるこの条約は、これらの協議・検討の結果であり、私の政府の意見も反映しているが、反映していない点もあるのが実状です。私は現時点では、これが日本との和平を討議したい国々の間で達成可能な最も共通する意見であることを表していると主張します。

アジアの国々を活気づけるため——セイロン、インド及びパキスタン——における日本への主な考えは、日本は自由な国にするべき、であります。そしてこの条約は、その考えを完全に具現しているといえます。日本の自由という論点において他の付随的な問題があります。すなわちその自由は、本州・北海道・九州及び四国だけに止まるべきか、或いは近隣する小さな島々にも及ぶべきか？ もし及ばないとしたら、これらの小さな島々をどうすべきか？ 台湾は1943年のカイロ宣言に従い中国に返還すべきか？ どちらの中国政府に？ 中国を講和会議に呼ぶべきか？ もし呼ぶならどちらの政府か？ 日本に賠償を迫るべきかもしそうなら、その金額は？ 日本が防衛力を組織するまで、日本はいかにして自国を守るのか？

日本の自由に関する主な問題について我々は最終的に同意に達し、

そして条約は、その同意を具現しています。他の問題については、著しい意見の相違がありますが、条約には、大多数の見解が示されています。我が政府は、これらの問題点が他の方法で明らかにされていたら、私の政府はそちらを好んだでしょう。しかし大多数が我国に同意しないという事実は、自由で独立した日本という中核概念を含む此の条約に我国が調印するのを控えるという理由にはなりません。

私が申し上げた一連の事柄は、日本が自由であれば解決され、日本が自由でなければ解決されない事柄だと思います。自由な日本については、例えば国連を通じて世界の他の自由な国々と討論をかわし、早期に満足のゆく決定に達することができるのである。この条約に署名することで日本はそれが可能になり、また、日本が望むならば中国の政府と友好条約を締結することができ、そしてこれは私にとってもうれしいことですが、日本はインドとも平和友好の条約を結ぶ事が出来るのです。しかし、我々がこの条約に調印しなければこれらのことはどれも最終的に結実しないのです。

なぜアジアの人々は、日本が自由であることを熱望するのか？ それは我々が日本と長い年月に亘る関係があるためであり、それは、被支配諸国であったアジア諸国の中で日本が唯一強く自由であった時、そのアジア諸国民が、日本を保護者として、また友人として仰いでいた時に抱いた日本への尊敬の念からです。

思い起こせば、さる大戦中に、日本の唱えたアジア共存共栄のスローガンが人々の共感を得、自国が解放されるとの望みで、ビルマ、インド及びインドネシアの指導者の中には日本に呼応した人達もいたのです。

わがセイロンの人々は幸運にも直接に侵略されなかったが、空襲や東南アジア軍の下、大量の数の軍隊の駐留による被害など、また連合軍に対する唯一の生ゴムの生産者であり、我が国の重要産業品である生ゴムの大量採取による損害に対して我国は、当然賠償を求める権利を有するのです。しかし、我々はその権利を行使するつもりはありません。なぜならアジアで何百万人もの人達の命を価値あるものにさせた大導師の"憎しみは憎しみによっては止まず、ただ愛によってのみ止むとの言葉を信じるからです。この言葉はブツダ大導師——佛教創設者——の言葉で、人道主義の波を北アジア、ビルマ、ラオス、カンボジア、泰国、インドネシア及びセイロンに拡げ、また同時に北方へ、ヒマラヤを越えてチベットから支那を経て最後に日本に及んだものです。その波は我々を何百年もの間にわたって共通の教養と伝統とでもって結び合わせているのです。この共通の教養は、現在も脈々と存在していることを私は先週この会議に出席する途中、日本に立ち寄ったときに見出したのです。日本の指導者、国務大臣、一般の人達、そして寺院の僧侶など、日本の庶民は現在も大導師の平和の教えに影響されており、その教えに従いたいという希望に満ちている印象を感じたのです。我々はその機会を日本人に与えなければならない。

ソ連は日本の自由は制限されるべきだと申し入れているが、今述べた理由で、私はソ連代表の意見を記名し承諾することはできない。ソ連が日本に課したい制約とは、日本が自由な国家として許される自国を守る兵力を維持する権利の制限や、その他ソ連が申し入れる制約は、ここに出席されている大多数の代表団ばかりでなく、出席していない他の国々にも、この条約の承認を難しくしている。特に

この条約が意図していることよりも、更にそれ以上をのぞむインドは絶対に反対するはずである。もしソ連が、琉球及び小笠原諸島が、カイロ及びポツダム宣言に反して日本に返還されるべきと再要求するならば、ではなぜソ連は南樺太と千島列島を日本に返還すると申し出ないのか。

その他ソ連の修正条項も興味のあることです。日本の自由について言及しているが、これらの自由はソ連の人々自身が享受したいと強く望んでいる自由だということです。従ってソ連の提出した修正条項に我々が同意することができない理由は、この条約は日本に宗主権と平等と尊厳をとり戻させることであり、制約をつければ不可能となるからです。この条約の目的は、日本を自由な国にし、また日本の復活に何らの制約もつけず、日本自身で外からの攻撃や又国内での騒擾に対して軍事防衛を組織するようにさせ、その時期がくるまで日本が自国を守るため、友好強国から援助を求めやすくし、経済に悪影響を与えるような賠償金を日本から取り立てないようにする為のものであります。

この条約は敗北した者に対するものとしては寛容な内容ではありますが、我々は日本に対して友情の手を差し伸べましょう。人類の歴史のこの章をとじるにあたり、今日書いているこれが最後のページとなることでしょう。そして、明日からまた新しい歴史の章の第一ページを記すにあたり、日本人と我々が共に手を携えて人類の生命の威厳を存分に充たし、平和と繁栄のうちに前進することを祈念する次第であります。

(出典：在日スリランカ民主社会主義共和国大使館)

The Japanese Peace Treaty (English)

Speech at the Conference for the Conclusion and Signature of the Treaty of Peace with Japan, San Francisco, U.S.A. 6th Sept. 1951

Mr. Vice President and Friends,

I consider it a great privilege to be afforded the opportunity of placing before this assembly of fifty-one nations the views of the Government of Ceylon on the draft Treaty of Peace which we have been invited to approve. My statement will consist of the reasons for our acceptance of this treaty, and I shall also attempt to meet some of the criticisms that have been levelled against it. It is true that I can speak only on behalf of my Government, but I claim that I can voice the sentiments of the people of Asia in their general attitude towards the future of Japan. I need not deal with the events that led to the formulation of the final draft of the treaty which we are considering. Mr Dulles, the American representative, and Mr. Kenneth Younger, the British representative, have given us a full and fair account of those events, beginning with the capitulation of Japan in August 1945. It may, however, be mentioned that there was a serious conflict of opinion between the four major powers as to the procedure that should be adopted to draft this treaty. The Soviet Union insisted that the four major powers alone - that is, the Council of Foreign Ministers of the USA, UK, China and the USSR - should alone undertake it, and that the power of veto should be reserved to them if any others were admitted for the purpose of drafting the treaty.

The United Kingdom insisted that the Dominions should be consulted and the United States of America agreed with this. They also supported consultation with all the countries that took part in the war against Japan.

Among these countries, too, there was a difference of opinion as to the actual terms of the treaty actuated by various considerations, some by a fear of the raising of a new militaristic Japan, and others yet unable to forget the damage and horrors caused by the Japanese invasions.

I venture to submit that it was at the Colombo Conference of Commonwealth Foreign Ministers held in January, 1950, that for the first time the case for a completely independent Japan was proposed and considered. The Colombo Conference considered Japan not as an isolated case, but as part of the region known as South and Southeast Asia, containing a large proportion of the world's wealth and population, and consisting of countries which have only recently regained their freedom, whose people were still suffering as a result of centuries of neglect. Two ideas emerged from that Conference - one, that of an independent Japan, and the other, the necessity for the economic and social development of the peoples of South and South-East Asia, to ensure which, what is now known as the Colombo Plan was launched.

Mr Kenneth Younger has explained how, after that Conference, a Working Committee of Commonwealth High Commissioners worked on a draft treaty, and later had consultations with the American representative, Mr Dulles.

The treaty now before us is the result of those consultations and negotiations. It represents some of the views that my Government had, and some of them which it did not have. I claim that at the present moment it represents the largest common measure of agreement that could be attained among the countries that were willing to discuss peace with Japan.

The main idea that animated the Asian countries, Ceylon, India and Pakistan, in their attitude to Japan was that Japan should be free. I claim that this treaty embodies that idea in its entirety. There are other matters which are external to the question of Japan's freedom - namely, should that freedom be limited to the main islands of Honshu, Hokkaido, Kyushu, and Shikoku, or should it extend to several minor islands in the neighbourhood? If not, what should we do with those islands? Should Formosa be returned to China in accordance with the Cairo Declaration of 1943? If so, to which Government of China? Should China be invited to the Peace Treaty Conference? If so, which Government? Should reparations be exacted from Japan? If so, the amount. How is Japan to defend herself until she organizes her own defence?

On the main question of the freedom of Japan, we were able to agree ultimately, and the treaty embodies that agreement. On the other matters, there were sharp differences of opinion, and the treaty embodies the majority views. My Government would have preferred it if some of those questions were answered in a different way, but the fact that the majority don't agree with us is no reason why we should abstain from signing the treaty, which contains the central concept of a free and independent Japan.

We feel that the allied matters I mentioned earlier are not insoluble if Japan is free, that they are insoluble if Japan is not free. A free Japan, through, let us say, the United Nations organization, can discuss these problems with the other free nations of the world and arrive at early and satisfactory decisions. By signing this treaty we are enabling Japan to be in a position to do so, to enter into a treaty of friendship with the Government of China if she decides to recognize her, and I am happy to state, enabling her to enter into a treaty of peace and friendship with India. If we do not sign this treaty, none of these eventualities can take place.

Why is it that the peoples of Asia are anxious that Japan should be free? It is because of our age-long connections with her, and because of the high regard the subject peoples of Asia have for Japan when she alone, among the Asian nations, was strong and free and we looked up to her as a guardian and friend. I can recall incidents that occurred during the last war, when the co-prosperity slogan for Asia had its appeal to subject peoples, and some of the leaders of Burma, India, and Indonesia joined the Japanese in the hope that thereby their beloved countries may be liberated.

We in Ceylon were fortunate that we were not invaded, but the damage caused by air raids, by the stationing of enormous armies under the South-East Asian Command, and by the slaughter-tapping of one of our main commodities, rubber, when we were the only producers of natural rubber for the Allies, entitle us to ask that the damage so caused should be repaired. We do not intend to do so, for we believe in the words of the Great Teacher whose message has ennobled the lives of countless millions

in Asia, that "hatred ceases not by hatred, but by love". It is the message of the Buddha, the Great Teacher, the Founder of Buddhism, which spread a wave of humanism through South Asia, Burma, Laos, Cambodia, Siam, Indonesia and Ceylon, and also northwards through the Himalayas into Tibet, China, and finally, Japan, which bound us together for hundreds of years with a common culture and heritage. This common culture still exists, as I found on my visit to Japan last week on my way to attend this Conference; and from the leaders of Japan, Ministers of State as well as private citizens, from their priests in the temples, I gathered the impression that the common people of Japan are still influenced by the shadow of that Great Teacher of peace, and wish to follow it. We must give them that opportunity.

That is why I cannot subscribe to the views of the delegate of the Soviet Union when he proposes that the freedom of Japan should be limited. The restrictions he wishes to impose, such as the limitation on the right of Japan to maintain such defence forces as a free nation is entitled to, and the other limitations he proposes, would make this treaty not acceptable not only to the vast majority of the delegates present here, but even to some of the countries that have not attended this Conference, particularly India, who wished to go even further than this treaty visualizes. If again the Soviet Union wishes the islands of Ryukyu and Bonin returned to Japan, contrary to the Cairo and Potsdam Declarations, why should then South Sakhalin, as well as the Kuriles be not also returned to Japan?

It is also interesting to note that the amendments of the Soviet Union seek to insure to the people of Japan the fundamental freedoms of expres-

sion, of press and publication of religious worship, of political opinion and of public meeting - freedoms which the people of the Soviet Union themselves would dearly love to possess and enjoy.

The reason why, therefore, we cannot agree to the amendments proposed by the Soviet delegate, is that this treaty proposes to return to Japan sovereignty, equality and dignity, and we cannot do so if we give them with qualifications. The purpose of the treaty then is to make Japan free, to impose no restrictions on Japan's recovery, to see to it that she organizes her own military defence against external aggression, and internal subversion, and that until she does so, she invites the aid of a friendly power to protect her, and that no reparations be exacted from her that harm her economy.

This treaty is as magnanimous as it is just to a defeated foe. We extend to Japan a hand of friendship, and trust that with the closing of this chapter in the history of man, the last page of which we write today, and with the beginning of the new one, the first page of which we dictate tomorrow, her people and ours may march together to enjoy the full dignity of human life in peace and prosperity.

(出典：在日スリランカ民主社会主義共和国大使館)



鎌倉大仏殿高德院住職佐藤孝雄師撮影・提供



日本とスリランカの友好の礎を築いた J.R. ジャヤワルダナ

日本を訪れたスリランカ人、またその反対にスリランカを訪れた日本人の多くの方が、お互いの国にとっても親近感を感じるようです。それは、日本もスリランカも中国やインドといった大国の近くに位置する島国で、ともに仏教を文化の背景に持っているということによるのかもしれませんが。私も、かつて日本に留学したこともあり、大の親日家の一人です。この両国の友好の礎を築いた、私が心から尊敬するジュニウス・リチャード・ジャヤワルダナ（1906年～1996年）をご紹介します。

スリランカでは「J. R.」の愛称で知られる、J. R. ジャヤワルダナは、イギリス領セイロン（現・スリランカ）の最高裁判事の長男として生まれました。優秀な成績でコロombo法科大学を卒業し、法律家となりましたが、その後、政治の道へと転身、1948年、セイロンがイギリスから独立した際、初代の財務大臣となります。

そして、1951年、第二次世界大戦の対日講和会議であるサンフランシスコ講和会議にセイロン代表として出席しました。この講和会議は、連合国に占領されている日本の独立を認めるかどうかを議論し、すでに日本の独立を認める講和条約案がまとめられていましたが、一部の国の反対によってなかなか審議が進みませんでした。その時、セイロン代表として颯爽と演台に立ったジャヤワルダナは、「日本の掲げた理想に、独立を望むアジアの人々が共感を覚えたことを忘れないでほしい」と述べ、さらに、「憎悪は憎悪によって止むことはなく、ただ慈愛によってのみ止む」（英訳：Hatred ceases not by hatred, but by love.）とい法句経（ダンマ・パダ）という經典からの

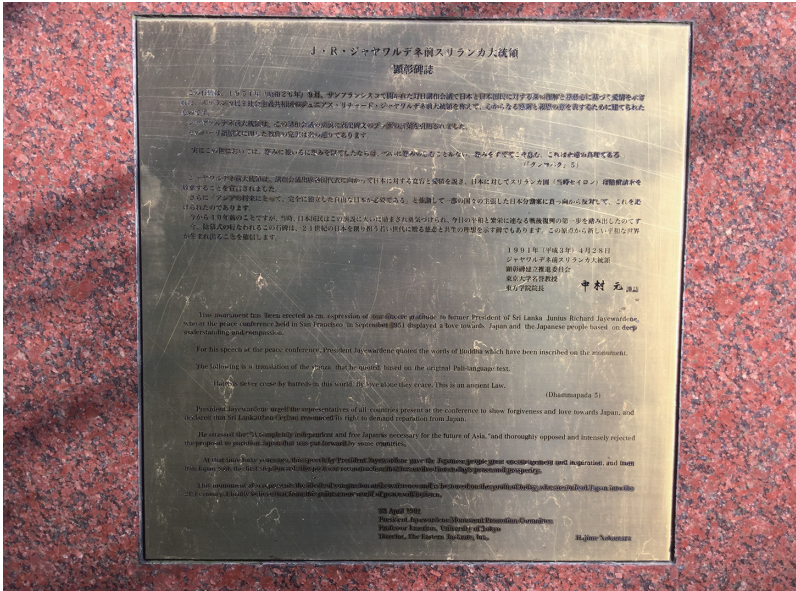
一節を引用して、セイロンは日本に賠償請求をしないことを宣言したのです。彼の演説が終わると賞賛の拍手は鳴りやまず、議場は一転、講和条約締結へと動いたのです。余談ですが、私は日本に赴任して、1200年前に書かれた本に、伝教大師最澄という高僧がこの法句経の同じ一節を述べられていたことを知って驚きました。このことでも両国の精神の深いつながりを知ることができるでしょう。

この講和条約を境に日本は空前の経済発展を遂げましたが、その中で昭和天皇はこの時のジャヤワルダナの演説に感謝され、スリランカに多くの援助がなされました。こうした両国の助け合いを見て、大統領になったジャヤワルダナには日本に恩を売る目論見があったかのように言う者がおりましたが、彼には決してそのような気持ちは全くありませんでした。彼は、少年時代、コロンボに寄港した当時皇太子だった昭和天皇のお乗りになった船を見に行くほど、日本に憧れ、尊敬していたのです。イギリスの統治下にあって、自国の伝統文化が衰退するセイロンでは、同じアジアにあって西欧の列強に対して互角に渡り合い、自分たちの文化と伝統を守る日本は輝いて見えたのです。その証拠に、彼の死後、遺言によって、右目はスリランカ人に、左目は日本人に、それぞれの角膜が移植されました。

彼が礎を築いた両国の友好が、今後も末永く続くことを願ってやみません。

スリランカ民主社会主義共和国 駐日特命全権大使
ダンミカ・ガンガーナート・デイサーナーヤカ

世界の平和を願った中村元先生



顕彰碑の背面に記された中村元先生のお言葉

私の恩師中村元先生は1912（大正元）年に生まれ、1999（平成11）年に亡くなりました。中村先生はいわゆる戦争の世紀といわれる20世紀が生んだ思想家でありました。

中村先生の考えによれば、「人間は思想なしには生きていくことが出来ない。思想などはいらぬのだということ自体が、また一つの思想である。」「思想の推移、変化というものは、人間の社会において、人間の現実生活に即しておこなわれたものであるに違いない。……そこでは心の中での深刻な葛藤抗争があったに違いない。思想史家はその心の中の苦悩の呻き声をききとらねばならぬ。」そしてその思想は自然に現れ出るのではなくて、「つねに歴史的社会的諸条件のなかで生まれてくるものであり、思想と歴史・社会との連関

の問題も非常に重要である」とし、さらに宗教は人間の生み出した最も偉大な思想体系であると中村先生は考えておられました。

中村先生は異なった伝統を持つ東洋と西洋の思想のみならず、ユーラシア大陸全域に見られた思想の比較研究を非凡な語学の才を駆使して大々的に進めました。その結果集められた膨大な資料の綿密な分析から東洋でも西洋でもほとんど同じ問題が論じられており、しかも従来劣っていると考えられていた東洋思想は、決してそのようなことはなく、西洋思想と平行的な発展過程を辿っていることを明らかにし、前人未踏の『世界思想史』全四巻を完成されました。これは視野を広く世界にとり、比較という手法による、世界のだれも試みたことのない普遍的な思想史の最初の不滅の金字塔でした。そして『世界思想史』全四巻の最終的な結論として、中村先生は次のように申します――

「われわれは以上の考察によって人類の一体なることを知りえた。思想は種々の形で表明されるけれども、人間性は一つである。今後世界は一つになるであろう。今日では従前のいかなる時期におけるよりも以上に異なった文化圏の間の相互理解が敏速に行われている。……世界の哲学宗教思想史に関するこのような研究が、地球全体にわたる思想の見通しに役立ち、世界の諸民族の間の相互理解を育てて、それによって人類は一つであるという理念を確立しうるにいたることを、せつに願うものである。」

と、このように中村先生は、その強い願いを、次世代に託してその『世界思想史』を結んでおられます。

では、今後われわれは、如何に生きるべきでしょうか。将来一つになるであろうこの世界において、しかし現在は怨念と我執が渦巻き、テロの恐怖におののくこの世界において、一挙に人類を滅亡できる威力を持つ核爆弾を盾にして、動物の縄張り争いのように牙を

向き合っているこの現実の世界において、どのように生きていけばよいのでしょうか？

残念ながらこの間に対する回答は、自然科学や技術が如何に発達しようとも、自然科学や技術からは得られません。自然科学や技術は人類を滅亡できる核爆弾をつくることはできても、如何に生きるべきかに答えてくれません。中村先生は、その解答を、その半生を捧げて探求されてきた人文科学の一分野である東洋の思想・精神的伝統の中に、真剣に求められました。中村先生は：

「私は長い間、東洋の思想・精神的伝統の探究をしてまいりました。それを貫く〈東洋のこころ〉と言うものがあるとすれば、それは一体何か。その底を流れるものを求めての半生であったといっても過言ではないように思います。その〈何か〉とは、ひとり東洋のみのものではなく、普く、広く、世界の人々にいきわたっているものに違いない。そのような確信をもつものです。その何かこそ、「温かなこころ」ということではないかと思うのです。」と述べておられます。

そして中村先生は、平成五年、ある講演会の折に、「人間の永遠の真理というものは何かということになりますと、それは人々に対する温かいこころということが言えるかと思うのです。」「これは仏教の伝統的な言葉で申しますと慈悲ということですね。ここに教えの真髓が極まっているのではないかと思うのです。」と、力強く、聴衆に語りかけられました。

その講演会の後、1995（平成7）年、中村先生82歳の誕生日に、東京の多磨墓地にあるお墓に、「ブツダのこぼ」「慈しみ」の石碑を建立することを発願されました。しかしその翌年に病気治療のために実現が遅れ、1997（平成9）年の令夫人の誕生日、すなわち5月4日に完成したのではないかと思います。

墓石は黒光りのする南インド産のクンナムで、碑文は場所の制約もあり、原始仏典『スッタニパータ』のこぼの精髓を汲み取って

意識され、それを令夫人が筆で書かれ、中村先生の世界平和実現への熱い願いを込めて、ご夫妻で「如何に生きるべきか」を、後世の人々に刻み残されたものと思われます。

その「ブッダのことば：慈しみ」とは――

一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、

安穩であれ、安樂であれ。

一切の生きとし生けるものは幸せであれ。

何びとも他人を欺いてはならない。

たとどこにあっても他人を軽んじてはならない。

互いに他人に苦痛を与えることを望んではならない。

この慈しみの心づかいを、しっかりとたもて。

であります。

この僅か二年後、すなわち1999（平成11）年10月10日に、中村先生は享年86歳で亡くなりました。

文明の発達により、一つの島国のようになった狭い地球上で私共はどのように生きていけばよいのでしょうか？ 中村先生は、その解答を、東洋の思想・精神的伝統の中に求めました。その結果得られたものは「温かなところ」でした。それは仏教のことばで言えば「慈悲」でした。「慈しみのところ」でした。

このインドに由来する慈悲は、仏教特有のものではありません。中国の孔子の思想の中心的な理念である「仁」に相当するものであります。慈悲はまた寛容の精神や和の精神やキリスト教の愛とも相通ずるものがあります。「温かいところ」「慈しみのところ」をもって、世界平和の実現に向けて一歩でも、二歩でも進もうではありませんか。

2020年元旦

公益財団法人中村元東方研究所
理事長 前田専學



2012年10月10日に、出身地の島根県松江に開館した中村元記念館の裏手の大塚山に建てられた「慈しみ」の言葉の石碑。中村元博士は終生この言葉を人生の指針としていた。



中村元博士が翻訳されたお釈迦様の「慈しみ」の言葉を、中村洛子夫人が書かれた。

編集の経過

このパンフレット作成の経緯を簡単に述べます。令和元年10月10日発行の「東方だより」に前田理事長が中村先生の世界平和の願いとして紹介されたJ. R. ジャヤワルダナ元スリランカ大統領顕彰碑誌についての記事を読んで、早速、鎌倉大仏殿に行きました。そこには29年前に建立された顕彰碑がひっそりと立っていますが、参拝者の多くの人は気づかないか、チラリと見るだけで行き交っていました。裏面の文章も水ゴケが付着し判読が出来にくい状況でした。

その後、縁あって高田達雄氏（元東京都市大学教授）がダンミカ大使から頂いた一冊の本[*1]を借用して講演の全文を読んだところ、これは是非とも多くに人たちに知ってもらう価値があると思い、行動に移しました。すると直ぐに、ダンミカ大使と深い縁のある浮岳亮仁師（天台宗泉福寺副住職）とつながり、大使からのメッセージを頂くことができました。また、前田理事長には中村先生の平和への願いの記述をお願いしました。これで終了かと思っている時、スリランカに深い関心のある友人から企画発起人である上坂元一人氏（元アジア文化交流協会事務局長）が顕彰碑建立について書かれた本[*2]を上梓されていることを知りました。そこには高德院に建立することになった経緯や除幕式にはジャヤワルダナ元スリランカ大統領夫妻が出席された様子などの詳細がすべて記録されています。素晴らしく、興味深い本です。

その後は先の友人の紹介と案内で、上坂元氏ならびに高德院を訪問して快諾を得ることができました。

繰り返すようですが、ジャヤワルダナ元スリランカ大統領の演説

に込められたブッダの慈しみの言葉は、宗教の異なる多くの代表者の心にも届いたことを裏付けています。現在の世界が自国中心主義を前面に出して、覇権争いの様相になり、弱者や他国移民には厳しい社会になっています。

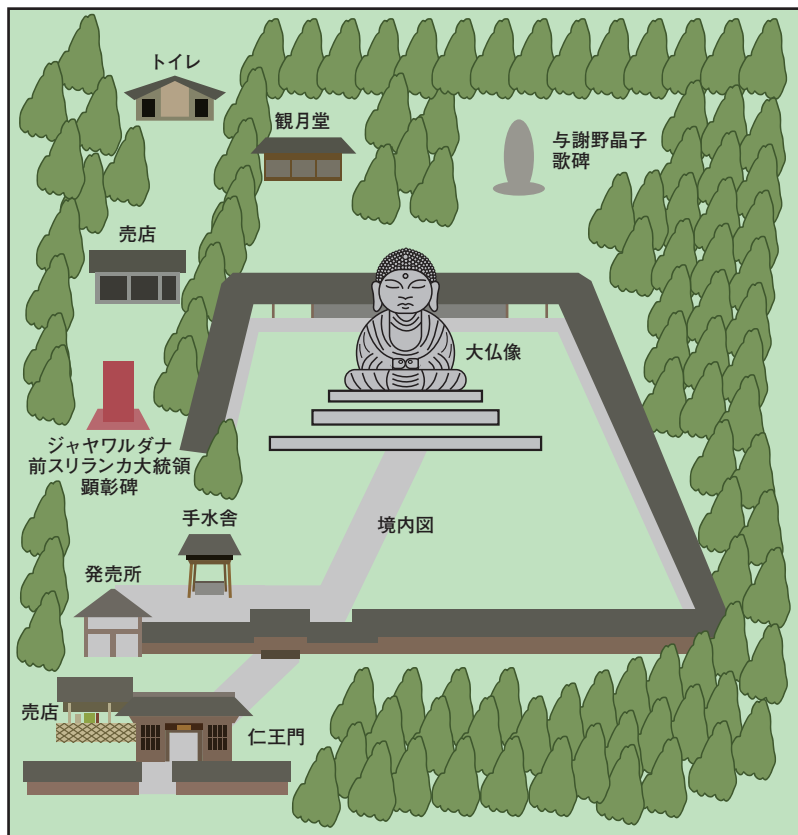
このような状況であればこそ、中村元先生の「ブッダのことは：慈しみ」に示された「温かなところ」「慈しみのところ」を持つことが、人間が幸せに至る道であることを知ってほしいとの思いで編集しました。編集がほぼ終了した3月下旬には新型コロナウイルスが世界規模で急速に感染拡大し、日本でも4月16日には全国に緊急事態宣言が発出され5月末まで外出自粛により経済活動が制限されました。予想をもしない感染症による世界的大混乱が起こり、国家間の利害問題も発生しています。このような時にこそブッダの言葉が持つ意味が問われます。パンフレットの発行は遅れることになりましたが、このパンフレットを、多くの皆さまに、手に取って読んでいただけることを願っています。

後藤 一敏（東方学院研究会員）

- * 1 『錫蘭島 スリランカ The Bridge of Culture Vol.01 セレンディビティに出会う』創英社／三省堂書店 2019年9月
- * 2 『大仏様と愛の顕彰碑—ジャヤワルダナ元大統領と日本』上坂元 一人 かまくら春秋社 2019年1月



高德院境内と 「ジャヤワルダナ前スリランカ大統領顕彰碑」



取材協力

在日スリランカ民主社会主義共和国大使館

(公財) 中村元東方研究所／東方学院

鎌倉大仏殿高德院

上坂元 一人

2020年9月1日発行

発行者 後藤 一敏

〒215-0006

神奈川県川崎市麻生区金程2-7-12

電話：044-952-5438

制作 株式会社サンガ

〒983-0862

宮城県仙台市宮城野区二十人町307-10

ロイヤルマンション二十人町601号

電話：022-355-7991

